

日本の貨幣史の 世界史的意義を語る

東京大学東洋文化研究所教授 黒田明伸

東京大学大学院総合文化研究科准教授 桜井英治

(本連載監修)

日本における独自の貨幣の鑄造は東アジアでは中国に次ぐものとされています。その後鑄造貨幣から物品貨幣の時代となり、宋銭の流入による渡来銭の使用、貨幣の自鑄再開と独自の歴史を重ねます。こうした動きの持つ意義は、国内の動向だけを見ていてはわかりません。そこで、最終回となる今回は、この連載の監修者である桜井先生と世界史的な視点で貨幣を研究されている黒田先生に、日本の貨幣史の世界史的な位置付けについてお話をいただきました。

なぜ、日本で銅銭鑄造が 始まったのか？

東京大学東洋文化研究所の黒田明伸教授。ご専門は伝統中国の貨幣・金融・市場構造・財政、ならびにそれらについての日本・朝鮮・インド・紅海周辺および西ヨーロッパとの比較史。十六世紀以降の世界経済とアジア諸帝国との相互連関、貨幣の非対称性についての研究。主要著作『中華帝国の構造と世界経済』で一九九四年サントリー学芸賞受賞。近著に「東アジア貨幣史の中の中世後期日本」(『貨幣の地域史—中世から近世へ』岩波書店、二〇〇七年)。

桜井 「貨幣の歴史学」も今回が最終回となりました。この連載に

よって日本の貨幣史の流れはなかなかよく見えてきたと思いますが、世界史的に見ると、それは普遍的なのか特殊なのか。そこで、今回は、日本の貨幣史の世界史的な位置付けを、黒田先生と考えてみたいと思います。

東アジア全体の流れから日本の

が一般的でした。穀物や布などはそれ自体が消費できるので受領されやすいのですが、あえて金属貨幣が日本で早い時期から造られるようになったのには、それなりの意味があるはずですが、中国の模倣という面もあったでしょうが、日本で銅を産出できたことも大きかったと思います。

一方、地中海世界、特にローマ帝国でも最初の金属貨幣は銅貨でした。これはローマが都市国家であり、都市住民の生活に小額貨幣が必要であったこと、そして市民が兵役を担ったことと関係していると考えています。中国も同様に兵農一致でした。つまり、国家が市民を徴兵して戦争に送るには、食糧や武器の調達が必要になります。その資金を各兵士に給付するには、使い勝手の良い小額貨幣が適当です。そこで、比較的大量に産出する卑金属である銅が貨幣として採用されたのだと思います。

桜井 兵農一致は古代の日本も同様でしたが、ただ、古代日本の銅銭鑄造は、兵役よりもむしろ、都城建設との関係が深いと考えられています。朝鮮半島の新羅も日本と同様、中国からさまざまな制度



東京大学総合文化研究科の桜井英治准教授。ご専門は中世日本を中心に、税制や財政などの諸システムの形成に贈与原理が果たした役割や、贈与経済と市場経済の関係、前近代特有の価格メカニズムとその背後にある労働観念、時間観念の解明について研究。主な著書に『日本中世の経済構造』、『室町人の精神』など。近著に『銭貨のダイナミズム』（貨幣の地域史―中世から近世へ）岩波書店、二〇〇七年。



西洋の古代銅貨
アス銅貨（古代ローマ）
都市国家ローマでは、都市住民の生活や兵役に当たる市民のための小額貨幣として銅貨が使われた。

東アジアの古代銅貨

日本は、中国の制度や文化を吸収しながら、律令国家の制度を固めた。和同開珎は、開元通宝など中国の伝統的な銭貨の形「円形方孔」をモデルに発行された。中国の都をモデルにつくられた平城京の建設にあたっての労働者への労賃の支払いなどに使われた。



わどうかいちん 和同開珎（日本・708年）



かいげんつうほう 開元通宝（中国・唐621年）

世界的な現象と 地域的な現象と

を導入しましたが、銅銭は新羅でもしかすると都城の規模と関係があるのかもしれませんが。一方、日本の鑄銭事業は十世紀後半に断絶しますが、面白いことに高麗やベトナムでは、逆にこのころから銭の鑄造が確認できるようになります。

黒田 中国の銅銭鑄造のピークは同時期の北宋時代でした。周辺諸国はその影響を受けたわけですが、日本だけは違った動きをしたことになりましたね。

桜井 日本では物品貨幣の時代を経て、十二世紀半ばからは中国銭を輸入して使い始めます。同時期の高麗では、中国に隣接していたにもかかわらず、主に麻布が貨幣として使用され、中国銭が流通した形跡はありませんから、ここでも、日本と朝鮮半島は違う動きをしていたことになりました。

黒田 十二世紀半ばに日本に中国から銅銭が入り始めたきっかけは、仏具の原材料としての需要ではないかと推測しています。例え

ば鎌倉の大仏を調べますと、その成分は北宋銭のものと一致します。朝鮮半島にはそこまで銅需要がなかったことと、中国から陸路なので輸送コストの問題があったのではないのでしょうか。

もう一つ重要なことは、中国銭が日本に入り始めたときには、民間ですでに使われてしまっているという事実が先にあり、幕府や朝廷はこれを仕方なく追認したにすぎないという点です。

桜井 民間での中国銭人気ということでは、銭がしばしば原価割れを起こした中国と違って、中国の日本では、中国銭が何世紀の間、地金の約三倍の価値を維持し続けていたことも注目されます。

また、中国銭が東アジアに広がったのとほぼ同じころ、雲南やインド洋沿岸、アフリカにはモルデイブ産の子安貝が貨幣として普及します。東の銭文化圏と西の貝貨文化圏、どちらも素材価値に基づかない一種の記号が貨幣として広域的に使用されるという、パラレルな現象として面白いですね。

黒田 モンゴルがユーラシア大陸を統一した十三世紀終わりから

十四世紀は世界的に銀貨が流通していて、日本での中国銭や雲南・インド洋などでの貝貨はそれと連関して流通していたという面がありました。その後、世界的に通貨が不足する時期があり、十六世紀に至って日本や中南米で銀が大量に産出されることで再び銀の流通が盛んになります。このように、世界各地で一見ローカルに起こっているような現象も、実は世界的な現象の中の一つだと言えます。



大量に発行された中国・北宋銭
元豐通宝（中国・北宋）
北宋は多いときは年50億枚を超える銭貨を発行した。

北宋銭の影響を受けて発行された周辺諸国の銭貨
10世紀後半、日本で銭貨の発行が途絶えたのと対照的に、朝鮮半島やベトナムではこのころから銭貨が発行されるようになった。



てんぷくちんほう 天福鎮宝（ベトナム）



かいとうつうほう 海東通宝（朝鮮半島）



マリア・テレジア銀貨（オーストリア）
18世紀の女帝像が描かれたオーストリアのこの銀貨は、20世紀前半にオーストリアでは流通しなくなっていたが、本国から遠く離れたアフリカ・西アジアで流通した。

偶然の果たす役割

桜井 中世日本の国制は西ヨーロッパの封建制に似ていると言われますが、貨幣政策や貨幣流通のあり方はかなり違いますね。

黒田 西ヨーロッパの貨幣史は銀貨中心ですが、実は十七世紀まで一般庶民はほとんど銀貨に触れることはありませんでした。中国のように、普通の人々が使う小額の金属貨幣を国家が供給している社会とは大きく違います。また、小額貨幣は回収が困難ですから、常に貨幣を造り続けなければ流通の規模を維持できません。

桜井 中世日本には、代銭納制といって、年貢を銭で納めさせるシステムがありましたから、中国よりは小額貨幣が回収されやすかったのではないですか。

黒田 収租権を細分しつつ京都という中心を持った荘園公領制が、結果的には貨幣を回収しやすかったのでしょうか。

桜井 代銭納制は、たまたま銅銭が中国から大量に入ってきたから生まれた制度で、それがなければ現物納が続いたでしょう。貨幣の歴史においてはしばしば偶然の大

きさを実感しますね。

黒田 私が研究しているオーストリアのマリア・テレジア銀貨の流通に関しても同じことを感じます。純度の高い銀貨が新たに出てきても、アフリカの人々は実際に流通しているこの銀貨を受け取りたがりません。つまり、ある流通の仕組みにいったん組み込まれてしまうと、それが偶然であつても、その後はそれを前提に仕組みが回り始めるようになるのです。

宋銭文化圏からの脱却

桜井 日本の貨幣流通への中国文化の影響をどう見ますか。

黒田 東アジアでは、貨幣は円形方孔であることが重要でした。受け取る側は、誰が発行したかという以前に、まずはこの形であることを求めました。つまり、東アジアから東南アジアでは、この形が通貨であることの暗黙の合意だったわけですね。その上で、それぞれの地方で自分たちの貨幣としてどの銭を受け取るかというローカルな秩序が生まれてくる。

桜井 十六世紀から十七世紀前半にかけての東アジアから東南アジ

アでは、ローカルな好みの違いはあるにしても、大体宋銭か、私鑄銭でも宋銭の銭文を持つものが好まれたわけですが、それに対し、十七世紀後半以降の東アジア貨幣史は、この宋銭文化圏からの脱却の過程と言つてもいい。日本では寛永通宝かんえいつうほうの鑄造が軌道に乗り、朝鮮でも常平通宝じょうへいつうほうが鑄造されました。ベトナムでも銅銭が大量に鑄造されましたし、十八世紀になると、中国でも乾隆通宝けんりゅうつうほうが大量に鑄造されます。これまで東アジア全体で連動していた貨幣史が、各地域で独立した動きを見せるようになってきますね。

黒田 十八世紀になると、世界各地で一般庶民が金属通貨を使うようになってきました。貨幣を国という行政の枠にはめる物質的根拠としていくわけですが、日本では寛永通宝がその最初でした。こうして、歴史上初めて日本、朝鮮、中国といった国の単位と、一般庶民の使う通貨の流通する範囲が一致します。

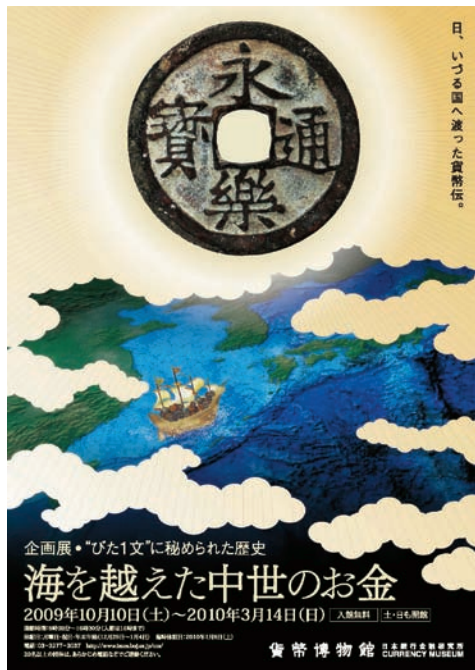
桜井 銀を中心とした世界システムのなかでの日本の位置付け、そしてそこに江戸幕府による「鎖国」がどのような影響を与えたかも重



要ですね。

黒田 寛永通宝は、「鎖国」が無くても必要だったでしょう。幕藩体制下の参勤交代という制度は、大勢の武士が遠距離を頻繁に移動したので、統一的小額通貨の大量な頒布が無いと運営できません。

桜井 大勢の武士が宿場で小額の買い物をするために寛永通宝が必要であったとすれば、兵士への給料用に発行された中国の銭や、都城建設の人員費を賄うために発行された古代日本の銭と同様に、小額貨幣を大勢の人々に一斉に支給する必要に迫られたことが、統一的小額貨幣発行の引き金になっ



貨幣博物館企画展「海を越えた中世のお金」

2010年3月14日(日)まで開催中!!

自国で銭貨を発行することなく、中国の銭貨を使用し続けた中世日本の独特の貨幣流通の実態を、貨幣博物館の多様な所蔵資料とともにご紹介しています。

江戸幕府により銀座で一元的に造られた銀錠・丁銀(日本・江戸時代)

中国の銀錠は制度が地域ごとに異なったが、日本の銀錠は江戸幕府が一元的に発行した。江戸時代の「三貨制度」のもとで金・銀・銅貨は、それぞれ金座・銀座・銭座で造られた。



各地方政権により発行された紙幣
藩札(福井藩・江戸時代)
藩札は、江戸幕府による三貨制度下の金属貨幣と並行して、地方政府である各藩により発行され流通した、世界でも特異な紙幣。

たと一般化できませんね。

黒田 一方、銀貨については、中国の銀両制度が地域ごとにバラバラなのに対して、日本では基本的に幕府が銀座で造る丁銀に一元化されています。

桜井 これは「鎖国」無しには維持できなかったと思います。ただ、「鎖国」下であっても銀は海外に流出したため、現銀は国内ではほとんど流通しなくなり、銀建ての

手形や藩札、あるいは銭匁勘定といった価値尺度として残るだけになっていきます。そんな中で、日本では東アジア世界では国際通貨でなかった金を基軸にした貨幣制度にたどり着きます。かといって、銀と銭が完全に補助貨幣となるわけでもなく、小額の地域内決済手段と高額な地域間決済手段がぴたつかみ合っていないところが逆に、貨幣流通に弾力性を与えていたようにも見えますね。

世界にもあまり例のない藩札という貨幣空間

黒田 日本の貨幣で一番特徴的なのは近世の藩札ですね。地域通貨ながら互換性があり、日本全体の貨幣流通のあり方に大きな影響を及ぼしていました。藩という地域政府の中で均質な貨幣空間をつくる一方で、大坂を中心とした日本

全体の貨幣流通とも互換性を持たせていたシステムというのは、世界にもあまり例がありません。

ヨーロッパの学者と話をしていると、紙幣の常識が日本とかなり違うのに驚かされます。ヨーロッパでは金貨や銀貨の流通があったり、紙幣はそれと兌換する高額紙幣が一般的でした。これに対して、日本の場合、藩札では一匁札といった小額紙幣が最も多く、そもそも大量に流通させることを目的に造られています。日本の藩札は、金属貨幣と兌換できるから受け取られたというわけではないわけです。また、中国では、銭票といって、個人商店が紙幣を発行した例もあります。日本、中国、ヨーロッパなど、世界の例を比べてみると、なぜ貨幣は流通するのかという基本的な問題に対する新しい知見が得られるかもしれません。

桜井 日本の藩札は、地方政権としての藩がしっかりと管理して発行していたという意味で、同時代の世界の中でも特異なケースだと思えます。面白いのは、近世の藩札と近代の国立銀行の設立がつながっていくことです。華士族に与えられた金禄公債を元手にほぼ元の藩ごとに国立銀行ができ、かつて藩札の発行に関わっていた武士たちが国立銀行に流れ、国立銀行券を発行していきます。



士族らの資本を元に設立された国立銀行が発行した紙幣 国立銀行券
1872年の「国立銀行条例」により設立された民間銀行が発行した紙幣。当初は正貨との兌換が義務付けられていたが、1876年に兌換が廃止された。秩禄処分(1876年終了)で年貢を徴収する権利を失った旧藩主・藩士がその代償として受け取った金禄公債を資本として、全国各地に国立銀行が設立され、銀行券を発行した。

黒田 金禄公債、つまり年貢を取る権利が長期資本に転じたわけですね。一方で、信用についても腑分けしていく必要があります。村で行われる相互融通などは、日本だけでなくイングランドでも見られ、それが工業化の資金となっていく点にも注目していく必要があります。